童

2014年６月２７日.

ようやく新芽の季節がやってきました。もう６月下旬なのに。というのも、自分の記憶にないほどの毛虫（ｱｲﾏｲｶﾞ）の大発生のお蔭で、気が付いたら、大地のアミアミ広場及び前庭が異常に明るいのです。春先にカラマツの間伐をしたせいだと当初は思っていましたが、実は毛虫。あの小さな体で、あれだけの緑を食べてしまうとは。小さい頃、蚕を飼っていて、毎日大量の桑の葉をあっと言う間に食べてしまう光景を思い出しました。更に、あんな小さな毛虫でも、数と毎日の地道な絶え間ない活動で、あれほどのおおそれた結果を出してしまうすごさ、それは、子どもたちが毎日薪運びをしたり、土手の土を削ったりしていくその結果と同じです。毎日、地道に少しずつ積み重ねるエネルギーを思い知らされました。（余談ですが、７０歳を超えて社交ダンスを始めて、８０歳を超え、世界の一流ダンサーになった人は、前屈柔軟で、毎日１ミリずつ伸ばしていって、身体を柔らかくした　というような話を聞いた事があります・・・）

晴天が続くと毛虫が発生し、雨が続くと病気（虫の病気か葉のそれかわかりませんが）が発生し、毛虫はいなくなるそうです。確かに、雨が続いたら毛虫が少なくなりました。梅雨だというのに、まだまだ雨が少ない毎日で気を揉みますが、子どもたちは、たんぼの小川でパンツになり水遊び、大地のスロープでは、ホースをつないで水遊びと、びしょ濡れになって元気に遊ぶ毎日です。一足早く夏が来たような光景が続いています。

毛虫が去り、再び緑の葉っぱで覆われる初夏の到来を期待して、また、雨に濡れて輝く緑の葉っぱを楽しみに、過ごしていきたいと思います。

【行って来ます】

広大な氷河帯から大きなクレバスをいくつも超え5300m地点から頂上まで突き上げる700mの雪壁を見上げたとき、これは死ぬなと思った。
単独、フリーソロ、風で固められた斜面、強風、様々な条件があったが、何よりも現時点での自分の実力を完全に超えていた。
引き返したその瞬間、心に去来したものは悔しさよりも安心感であった。完全に心が折れた。ペルーに何をしにきたんだと泣きたくなり、広大な氷河に1人叫んだ。…
ただ一つだけ言えるとしたら挑戦して本当に良かったということ。
最初から無理だとあきらめるのと、挑戦してダメだったのでは天と地の差がある。登頂はできなかったけど、白い頂きを目指し、息を切らし必死で登った過程は確実に存在する。最後に意味を持つのは、その過程なのではないかと思う。負け惜しみかもしれないけど。

ペルー遠征中の雄飛からその朝連絡がきた。雄飛が山へ入る時は、無事を祈って妻は、大好きなお菓子断ちをして無事を祈る。山への入山下山の連絡を必ず入れる約束となっている。その朝、雄飛から下山したという連絡が入ったと教えてくれたが、妻の声にはいつもの喜び溢れる　ニュアンスがなかった。それは、冒頭のメールだったからであろう。

でも、私は嬉しく、涙が出た。初めて、雄飛から死という言葉を聞いた。そして、それと冷静に向き合える雄飛を知った。心から安心した。登山の鉄則「行って来ます」は、行ったら必ず無事に帰って来ることが使命だからだ。

ペルー遠征前、私の両親を含めて家族の壮行会でのこと。35 年前の衝撃的話を母親から訊いた。私がバイクでオーストラリア遠征に出かける朝、牟礼駅では、雄飛と同じように同級生や関係者が、横断幕で見送ってくれた。もちろん、今のように、事前のインターネット情報も何もない時代。万が一があっても、容易に連絡が取れない時代。その牟礼駅には、母親は周囲から行かないように説得されて、その姿はなかったらしい（記憶にないが）。それは、取り乱すから止めた方がいいという事だったらしい。そう言えば、当時「息子は、いなかったものとして諦めるしかない」といった言葉だけは記憶にある。そんな事とは露知らず、英雄気分で友達達と盛り上がり、親の顔をまともに見ずに意気揚々と出かけて行った馬鹿者であった。親の気持ち子知らずで、只々、前を向いて砂漠冒険の旅に燃えていた親不幸者だったという事か。（その後、突然会社を辞めたり、新しい仕事についたり、突然保育の学校へ入ったり、またまた保育園を辞めて、山へ幼稚園を建てると言い出したり。その癖はなかなか抜けない。）

オーストラリアに渡り、2 週間ほど経ってから、初めて国際電話を入れた時の、電話口での母親の声は今でも記憶している。「本当に繁なのかい？　生きているんだね。本当にそうなのかい？・・・」今ではメールやスカイプで日常的に安否確認できるが、当時は、国際電話でもすごい事だった。それだけ、ドラマチックに心と精神で過ごしていた時代だった。

オーストラリアでの単独砂漠の旅は、毎番涙の連続だった。それは、寂しさと恐ろしさと不安で、「何で好き好んでこんな思いをしなければならないのだろう」と毎晩テントの中で泣いていた。一番の願いは「安心してぐっすり寝たいこと」であった。実は、臆病者で小心者。そんな奴が冒険などと世に言うものに出かけるには、不安を消すために、緻密な事前計画とプロジェクトを練るしかない。そして、最後は、それを通じて得た自信と確信。そして、死というものにいつも向き合える直感と「自分は絶対に幸運を持っており、死ぬことは全くイメージできないという確信」のみ。

そして現在。「親になって初めて、親の気持ちがわかる 」と言われているが、まさにわかりすぎる位わからせられる子ども達を持ってしまったようだ。近所の人たちは「繁ちゃんの子供たちだから」と顔を合わせれば、当然のように言う。さんざん親を心配させ泣かせてきた分、めぐり廻って、同じ分を自分に課せてくれるのか。まさに因果応報であるのだろう。

雄飛の旅立ちは何度も見てきた。親の心配をよそに、いつも嬉しそうに準備して出かけて行った。そういえば、今回の家族の壮行会で発した会話。「今までは、両親や友人たちが送り出してくれたけど、今回は、それに加えて、子どもたちのたくさんの顔が浮かんでくるんだよね。子供たちが後押しして見送ってくれる、子どもたちが応援そしてそこにいてくれる」ようなことをしみじみと言って出かけていった。そして、牟礼駅でも、三才駅でも、長野駅でも、成田空港でも、子どもたちが見送ってくれた。　この父以上に親不孝者でありながら、幸せ者かもしれない。

今回のペルーのアルテソンラフ。この山を事前に見なくてよかった。調べていたら、不安はとても大きかった。知らぬが仏。素直に、死ななくて本当に良かったが本音である。　だが、それと引き換えに、大きな生きる姿勢を、備えてくれていることだけは大きな財産である。

「ただ一つだけ言えるとしたら挑戦して本当に良かったということ。 最初から無理だとあきらめるのと、挑戦してダメだったのでは天と地の差がある。」（雄飛）

子ども達に伝えたい最高の子育てメッセージであると同時に、表裏一体　最高の親不孝であるかもしれない。